

「氷室」巻頭句一覧

巻頭句〔各号の右の句は氷壺集・左の句は氷室集〕

・・・・・・・・・・・・・・・・

平成19年(2007年)

12月号

晩夏かなピアスに深き海の色
京都 浅香すみ子
紫蘇の実のひそやかに時過ぎゆくも
京都 小野 耐

11月号

くはがたの来る樹は誰の秘密基地
京都 大島 幸男
芭蕉葉の雨音を聴き肘枕
京都 小野 耐

10月号

切り幣の海風に舞ふ夏祓
三重 山中ひでの
艾屋を出れば往時の夏野かな
大阪 中 次郎

9月号

しづけさや山葵も花をかかげたり
福島 秋元けい子
音高く傘を開きて五月雨へ
大阪 中 次郎

8月号

黒鯛の魚拓めく色捌きけり
茨城 余米 重則
青嵐山飛ぶごとく揺れてをり
京都 村上菜々子

7月号

複眼に吾を映して蝶生る
大阪 藏野 陽子
盛りとて貝母の花のしづかなる
群馬 高橋キセ子

6月号

埋み火のごとく地梨の花咲けり
群馬 長浜 利子
造成の土ねかさるる春の雨
京都 三和 幸一

5月号

葱植ゑて社家の築地の低き丈
京都 小野 耐
雪晴れや八ヶ岳八つ見えてをり
東京 森島 宏

4月号

山深く夜川の光る淑気かな
京都 小野 耐

雛市や幼な顔して尉と姥

京都

小野 耐

3月号

湖の色変へて時雨の去りにけり

福井

原 稔

針山の針を揉み出す一葉忌

大阪

村上由美子

2月号

雪止んで夜空の隅に星澄めり

福井

山奥 巖

後ろ手に障子を閉めてそれつきり

京都

小野 耐

1月号

刀受くるごとく自然薯貰ひけり

福井

原 稔

鈴生りの柿疲るると思ひけり

大阪

中 次郎

平成20年(2008年)

12月号

鹿垣を直すは鹿と語るなり

京都

小野 耐

違へずに出でくるものか彼岸花

兵庫

矢倉 修

11月号

閉づることかなはずはちす散りゆけり

京都

小野 耐

秋出水道路に救助のゴムボート

群馬

酒井 富子

10月号

ででむしの大曲りする巖かな

京都

大島 幸男

梅鉢草生き残りゐし演習地

長崎

大曲 幸代

9月号

三尺に足らぬ島路夏燕

京都

大島 幸男

廃校に育ちて燕巢立ちけり

大阪

藤岡 満

8月号

新緑の鶉は韋駄天走りして

茨城

吉田 進

石一つ動かし春田へ水落す

三重

山中ひでの

7月号

片口に塩壺春の厨かな

兵庫

矢倉 修

入学を待つ子の急かす名前書き

京都

井上 康子

6月号

鼠ゐる鼠捕器も雛道具
福祉課の手話の応対うららかや

京都

小野 耐

5月号

靴脱げばきぎはし温き厄詣
川幅を拡げて峡の春うごく

京都

小野 耐

4月号

通ひ路は銀波となりて甘蔗の花
連風のうねりつつ風掴みたり

沖繩

新垣 一枝

3月号

凧に短き文を読み返す
寒灯や干鰯つけおく水の塵

和歌山

澳 美恵子

2月号

蓮根掘り夕日を浴びて引き揚げし
時代祭げに逆臣の男振

兵庫

行天 博志

1月号

志ん朝のその兄も亡し温め酒
無花果に天金の書の旧びたる

京都

大島 幸男

平成21年(2009年)

12月号

精霊舟藁武者を乗せ船出する
穴まどひ川の日向を流れけり

三重

唐坂由加里

11月号

片蔭のほか悉く眩しかり
波音に祝詞消さるる海開

京都

大島 幸男

10月号

山門の敷居の乾き夏の蝶
片陰もなき金魚田を抜けて来し

群馬

高橋キセ子

9月号

蛩には水音といふ子守歌

京都

水野 純子

京都

三和 幸一

秋田

佐々木 成

茨城

吉田 進

ともかくも試合は進む夏の雨

京都

大島 幸男

8月号

初鯉縞を揃へて糶を待つ

三重

西村 文代

大粒の雨が襲ひぬ袋掛

大阪

藤岡 満

7月号

地下都市の隧道出でて花あんず

神奈川

宮澤 淑子

初花や御堂に鴟尾の復座成り

大阪

藤岡 満

6月号

人里を離れ三軒春遅し

群馬

真下 章子

火ばさみに醤油の匂ひ栄螺焼く

茨城

余米 重則

5月号

潜り戸に箒立てある日永かな

京都

水野 純子

番犬が毛布かぶつてをりにけり

滋賀

永井 潤子

4月号

白熊の白の汚れし寒さかな

滋賀

永井 潤子

葦枯れて風音つなぐものななし

三重

西村 文代

3月号

ことごとく凍てけり朝の光さへ

福島

秋元けい子

猪鍋の煮詰つてきし旨さあり

大阪

藤岡 満

2月号

幼にも渡世の悩み日向ぼこ

京都

大島 幸男

雲遊びをり錦秋のいろは坂

茨城

余米 重則

1月号

氏神のここより変はる秋まつり

京都

富井 恵子

ふがひなき鼻肩チームや蚯蚓鳴く

滋賀

村片 秀哉

平成22年(2010年) ※5月～10月、12月は氷室集よりのみ

12月号

陪塚に盗人萩は紅こぼす

滋賀

永井 潤子

11月号

棒もつて畦あゆまるる生身魂

京都

三和 幸一

稲つるび話の流れ変はりたり

群馬

高橋 千画子

10月号

笠智衆坐つてみさう夏座敷

茨城

余米 重則

9月号

白砂の花のまぶしき沖繩忌

滋賀

永井 潤子

8月号

トンネルは北陸へ抜け桐の花

京都

三浦 喜久子

7月号

初蝶を跨ぎ跨ぎて庭仕事

茨城

鴻坂 佳子

6月号

料峭や風音のみの天守跡

三重

山中 ひでの

5月号

切干の幾箆干して寡黙なる

和歌山

美崎 静代

4月号

落葉焚く煙に昭和の匂ひかな
忘年やワイングラスの細き足

埼玉

原澤 松乃
和歌山 美崎 静代

3月号

秋入日棚田の先の日本海
咳をしてふと放哉のこと思ふ

神奈川

植田 清子
京都 松重 幹雄

2月号

新米を付けて糶らるる但馬牛
蛇籠の目粗し萍もみぢかな

和歌山

江川よしみ
大阪 藤岡 満

1月号

膝に繰る辞典の重さ秋灯
翳るまで蜂の寄り添ふ石路の花

京都

浅香すみ子
茨城 吉田 進

平成23年(2011年)

※1月は氷室集よりのみ

12月号

山の露動けばそこに牛の群
留守番の男が二人秋刀魚焼く

群馬

佐藤美智子
兵庫 高濱 哲哉

11月号

噴煙の山に向ひて梅を干す
むし風呂のごとき夜が明け原爆忌

京都 松山 和子
京都 大南 勝臣

10月号

祭獅子避難の子らを先づ噛めり
輪中には昔語りの水敵

秋田 佐々木 成
岐阜 西五辻芳子

9月号

青梅雨や嘘には嘘のいらへして
国道を鴉の歩く薄暑かな

京都 大南 勝臣
京都 水野 純子

8月号

風薫る嬰の額に紅の大
植田には燃える太陽落ちにけり

京都 重富 國宏
群馬 千木良英子

7月号

春眠を破る余震の地鳴りかな
余震又あさり潮ふく金盥

茨城 余米 重則
茨城 鴻坂 佳子

6月号

齊咲く江口の寺の近くして
春眠の奈落の底に深々と

兵庫 矢倉 修
群馬 遠藤 長代

5月号

春禽と遊ぶ園児や良寛忌
きしきしと氷張り出す夕河口

三重 山中 ひでの
秋田 佐々木 成

4月号

人日や眼鏡のくもるままにゐて
年用意終へて同級生の店

京都 三和 幸一
京都 古川 邑秋

3月号

大根引くここに故郷があるやうに
城山の鞍部に円き冬の月

京都 大浦 友彦
和歌山 美崎 吉彦

2月号

舟寄せて時雨宿りの岩廂
尾花乾き柿濡れいろに村暮るる

大阪 藤岡 満
茨城 鴻坂 佳子

1月号

秋の蚊を払ひて指の触るるかな

京都 三和 幸一